

本資料は、2020年3月12日に開催することにしていましたが、新型コロナウイルス感染防止のために中止となりました「医療の質向上のためのコンソーシアム（Quality Improvement コンソーシアム）開催記念シンポジウム」において登壇者よりご発言いただく予定の内容の一部をとりまとめたものです。医療の質向上について大変重要なご示唆をいただいていますので、多くの皆様方にお伝えしたく、登壇者の許諾をいただき掲載しております。関係者一同、御礼申し上げます。

厚生労働省補助事業
医療の質向上のための体制整備事業

医療の質向上のためのコンソーシアム
開催記念シンポジウム
(意見のとりまとめ)

2020年3月12日

公益財団法人日本医療機能評価機構
医療の質向上のための体制整備事業事務局

医療の質向上のためのコンソーシアム
開催記念シンポジウム 登壇者一覧

カッコは、代理出席者

	団体名	役職	氏名（敬称略）
1	一般社団法人日本病院会	会長	相澤 孝夫
2	一般社団法人日本慢性期医療協会	会長	武久 洋三
3	公益社団法人全国自治体病院協議会	会長	小熊 豊
4	公益社団法人全日本病院協会	会長 (常任理事)	猪口 雄二 (永井 庸次)
5	公益社団法人日本医師会	会長 (常任理事)	横倉 義武 (城守 国斗)
6	公益社団法人日本看護協会	会長	福井 トシ子
7	社会福祉法人恩賜財団済生会	理事長 (理事)	炭谷 茂 (松原 了)
8	全日本民主医療機関連合会	会長	増田 剛
9	独立行政法人国立病院機構	理事長	楠岡 英雄
10	独立行政法人地域医療機能推進機構	会長 (理事)	尾身 茂 (瀧村 佳代)
11	独立行政法人労働者健康安全機構	理事長	有賀 徹
12	日本赤十字社	社長 (副社長)	大塚 義治 (富田 博樹)
13	厚生労働省 医政局	審議官	迫井 正深
14	公益財団法人日本医療機能評価機構	理事長 理事	河北 博文 亀田 俊忠

議題1

わが国では、治療のアウトカムなど医療の質を可視化する取り組みは、個々の努力がなされていますが、系統的にデータを収集する仕組みにはなっていないと指摘されています¹⁾。

そこで、「医療の質とは何か」「医療の質を系統的に可視化するにはどうしたらよいか」などについて、ご意見をお聞かせください。

1) OECD Reviews of Health Care Quality: JAPAN, 2014

医療の質

医療の質とは、現時点で善いとされている方法で患者に提供した診療・ケアがどの程度提供されたか、提供された結果、どの程度患者の健康が改善・向上したのか、その度合いであると考ええる。

医療の質とは、使用する目的により多岐に渡るが、少なくとも、コスト・パフォーマンスを含めた医療技術、アメニティーを含めた患者満足、そして質を均一に維持する組織・システムの3者の総体と考える。

医療の質（狭義）とは、医療を受ける側と医療を提供する側との信頼関係構築の下で適正な医療を適正に行うことと考える。ただし、各医療機関のおかれる環境に応じて、左右されるものとそうでないものがある。

医療の質とは、①診断・治療という医療行為そのものの質と、②これらを支える医療・体制・医療安全とに大きく分けられると考える。

医療の質を可視化する意義と留意点

様々な立場による解釈の相違があり、留意しなければならないことも多々あるが、可視化して測らないことには物事は変わることができない。他者と比較しない限り自身の立ち位置が見えないことから、指標を共有することには意味があると考ええる。一方、指標を「系統的」に統一することの意味については今後の重要な検討課題であると考ええる。

医療の質の系統的な可視化には、指標の計測と公表が必要と思われ、用いる指標はエビデンス（診療ガイドラインや安全性情報など）に基づいており、計測方法が標準化されたものが望ましい。

診療等の決定に対し説明責任を持つためには、組織のガバナンスが根底にある必要があり、組織として総合的質管理を実施することが、医療の質を系統的に可視化するために肝要であると考ええる。

質を正しく評価するためには、評価の目的と基準を明確にすべきと考える。

医療の質を系統的に可視化するためには、EBMに基づく指標を明確にしつつ、実績を踏まえて、その指標が正しいのかどうかの検証を繰り返した結果、具現化できるものと考ええる。

議題2

医療を提供する立場からは、指標を用いて医療の質を測定し可視化することにより、医療の質の現状把握や質改善に活用できると考えられます。しかし、必ずしも全国的に広く普及しているとは言えません。

そこで、全国の医療施設において、指標を用いた医療の質の測定・改善活動を普及させることについて、今後の展望や課題など、ご意見をお聞かせください。

指標を用いた質改善活動の留意点

まず、その指標が真に質の評価を表しているのかどうかのコンセンサスを得ることが重要と考える。

指標を用いた測定は「質の向上」を図ることが目的であるということを医療提供者の我われが認識すべきであり、我われの間でコンセンサスを得ることがポイントであると考ええる。

コストをどのように賄うのかという視点も重要である。持続可能な仕組みを構築していくためには、相当な時間を要すると考える。

質改善のためには課題の把握が必要となるが、課題は個々の病院より異なることを前提に検討を進める必要がある。そのためには、①全体像の把握と歪の有無、②歪の局在（診療科や部署、手順など）、③個人及び行為レベルで対処するためのデータなど、段階を理解し改善が実施可能な情報をわかりやすい形で院内に提供することが望まれる。

指標の理解（解釈）及び改善活動との結びつきを各施設のポリシーと関連して考えるという組織風土が欠けていると指標を活用した改善活動の効果はない。

指標を用いた質改善活動の普及

活動の普及には、「指標とは何か」、「指標をツールとして活用することの意味」を現場に理解してもらうことが重要と考える。そのためには、事例から一般化できるエッセンスを抽出し、体系的にまとめ広める方法もあるだろう。

医療の質の評価を普及させるためには、医療提供者と患者の双方が指標の持つ意味を正しく理解する土壌が必要である。

全国規模で取り組むためには、QIの取組の重要性を理解してもらうこととあわせて、指標に基づくデータの収集が簡便に実施できる手法の開発、担当者の配置、改善好事例の普及を中心とした交流、実務と収集したデータを活用するための人材の育成、これら取組における財政的支援が必要であると考ええる。

指標を扱える人材、データ基盤の整備などの必要性についてトップの理解は得られるが、実装させるには一定のインセンティブが必要になると考える。

全国の医療施設で指標を用いた医療の質測定・改善活動を行うことは必須であるため、指標の開発と全国の医療施設で活用できる標準化された情報システムが必要であると考ええる。

議題3

医療を受ける立場からは受ける医療の質を知りたいというニーズがあり、そのニーズに的確に応えることが求められます。

そこで、医療の質に関する公表のあり方や公表する情報（指標）の選択、一般市民のリテラシー向上の取り組みなどについて、ご意見をお聞かせください。

医療の質の公表における留意点

評価結果については、幾重に説明を行っても直感的に反応してしまうことを前提に、医療関係者自身のリテラシーを上げることが必要と考える。また、医療関係者が真摯に改善に取り組んだとしても、偏った公表となる可能性は認識すべきかもしれないと考える。

国民すべてを対象に平易で分かりやすい指標が必要であると考え（疾病が改善すると共にADLも改善している割合など）。

疾患に関する指標の公表に際しては、重症度の違いなど、対象患者の相違を明確にし、横の比較には意味がないことを周知する必要がある。

測定値を公表する場合は、測定の目的や前提となる条件を十分に国民に対して説明し、純粋に医療の質を測定可能な指標の選定を行うべきと考える。

指標が医療の質を正しく表しているのであれば、公表の方向性は理解できるが、医療機関の階層化が惹起される内容は、医療提供体制に大きな混乱を生じさせることに繋がるため避けるべきと考える。

一般市民の医療におけるリテラシー向上

市民による「知りたい”質”」の具体的な内容の議論が求められると考える。

小学生から医療を受けることに関するリテラシー教育を受けることなども、重要であると考え。

施設の機能、規模、地域性等により考慮すべき質指標（管理項目）、達成度（管理水準）も異なる。このような状況を国民が理解するためには、相当の啓蒙活動が必要と考える。一概に指標を決め、結果を公表することは非常に危険であり、医療崩壊につながりかねない。

市民のリテラシー向上は、地道な教育を進めることでしかないと考える（特に学校教育と保険証交付時の教育）。

指標を活用した質改善活動が、現在多くの病院で行われている事実を理解いただく取組が必要である。また、市民が医療の質について理解を可能とする取組も必要と考える。

議題4

「医療の質向上のための協議会」は、医療の質の評価・公表等に取り組んでいる病院団体等のご理解・ご協力のもと、「現場の自主的な質改善活動を充実させる」「医療の質を可視化し信頼性を向上させる」ことを目的に、指標を用いた医療の質向上に関わる諸課題を協議し、活動を推進する場です。

当協議会に期待することや今後の課題など、ご意見・ご要望をお聞かせください。

「医療現場が改善すべき課題・施策について議論が行える方法論」を広く普及させていくことが重要と考える。また協議会に参集した諸団体が一致し、個々の取組事例について情報を発信することも、いずれは信頼性を向上させる大きな力になって行くと期待する。

限られた医療資源の配分の中で持続可能な仕組みづくりを目指すべきであり、一部の偏った意見や物差しではなく、様々な視点から議論のできる協議会にして欲しい。

患者や家族にとって安心して医療を受けられる体制の整備に資するような検討・協議の場となることを期待する。

各団体の指標を整理することは大変な作業であるが、相互参照のシステムが構築されることは極めて重要であると考えており、協議会には是非その役割を期待したい。

病院のランキングに繋がる取組は避け、改善への努力を評価する視点に重心を置くようお願いしたい。

データ基盤の構築と人材育成及びトップマネジメントにおける医療の質に関する教育・研修に期待したい。

各医療機関が独自にPDCAサイクルを実践できるよう教育等を通じた支援を行い、各施設で成果が上げられていることを評価する仕組みを期待する。

これまでの取組実績を尊重し、現場と一体感のある取組となるよう工夫を期待する。また、病院の規模に関わらず、多くの医療機関が参加できる幅広い取組を期待する。

指標の標準化、指標を用いた医療の質改善の成功事例の普及に期待する。

医療の質向上に係る様々な取組について、広く国民に啓発することを期待する。

優れた取組を目指す方向性に異論はないが、拙速な方法・公開により医療提供体制を混乱させるような活動とならぬよう留意願いたい。